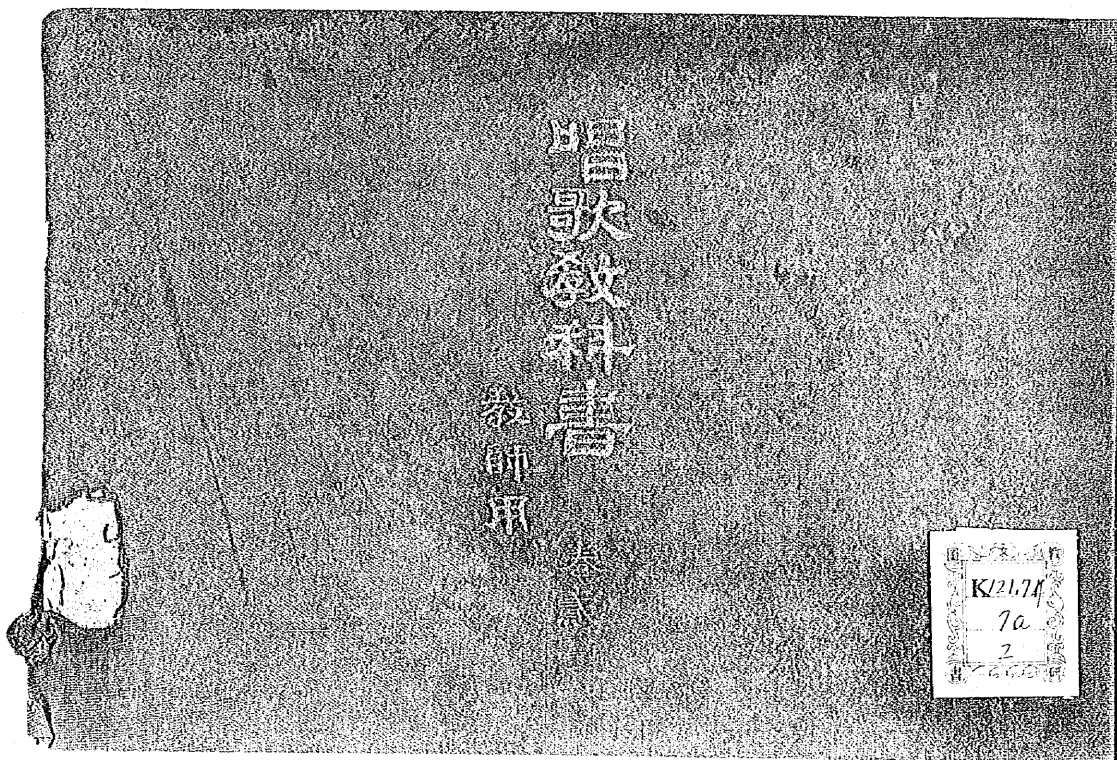




K121.74

7a

2

共益商社編

明治
29 4 6
丙午

明治參拾五年十一月十二日
文部省檢定
小學教科書
唱歌教科書
卷二

共益商社樂器店藏版

緒言

弊社晨に善良なる唱歌教科書の編纂を希圖するや、先づ在京知名の音樂及文學の數大家に乞うて、該書編纂上の審査監督の事を依頼し、同時に廣く書を全國各地なる専門の諸先生に致して諸地方に於ける該科普及上の狀況を始め、一般生徒の嗜好、歌曲難易の程度、旋法の種類、音域、歌曲の品題、分量及び其排列の順序、教授の方法、其他編纂上要用なる條目に付て、委細の經驗注意等を寄せられん事を乞ひ、之を統計して、先づ編纂上大體の順序方法を定め、品題を選び、以て文學の大家に之が作歌を依頼し、再び之を各地の諸先生に配布して其作曲を仰ぎ、集まれるもの數百曲の中に就て、更に前記編纂監督の任に當られたる諸大家の、最も懇切丁寧なる審議取捨を經、茲

に着手以來幾多の歲月を閲して漸く此の編
は成りたり、されば本書は、其編纂上最も精密
の手續きを履みて生れたるものなる事を信
ずるものにして、こゝに其歴史を序すると同
時に、謹んで之に干られたる諸大家に向つて、
深く其好意を陳謝すと云爾。

明治三十五年四月

本書の特色及び使用上

注意

程



本書は主として高等小學四年間の課程
に適應せしむる目的を以て編みたるもの

(されば本書の第三卷第四卷及び其他の
幾分は、また中學校及び高等女學校にも
適用するを得るものとす)

歌曲排
順

○ 本書に於ける歌曲排列の順序は、斯道の諸
大家の最も精密なる審査を経て成れるも
のにして、系統正しく漸次簡より繁、易より
難に進めるは勿論、遅き曲と早き曲と、並に
勇ましきものと優しきものとの配合、音域の
廣さ、題目並に歌想、曲想の程度、季節の順序、
及び各學期間に教授すべき歌曲の數等、凡
て最も適切なるべき様編まれたるものな
り、なほ曲を追うて、樂譜上新記號の現はる
る毎に、他の注意すべき諸項目と共に、必ず
之を、演奏注意欄内に記述したり、されば特
別の事情ある場合に非れば、妄りに之を取

捨變換する事なく、たゞ全々所載の順序のまま、教授を進行すれば足るものとす、

但し祝日大祭日等の唱歌は、本篇以外別に練習を要すべきものなれば、之を行ふべき學期間の曲數は、豫め其割合を以て排列しあるものと知るべし、なほ毎曲必ず充分生徒の熟練するを待って後、次の歌曲に移るべく、又常時既習曲を復習すべき事は論を俟たず、

高尚なる歌曲

○三四年生用の歌曲中には、在來の唱歌集の程度に比して、頗る高尚なるもの無しとせず、されども、もと本篇の歌曲は、悉皆これ本邦人の作にして、特に最も我兒童に適切なものをのみ、選み集めたるものなれば、彼の外人の作の我國情に叶はざるものゝ類を含まず、されば、一二年生より本教科書の順序により、正當の練習を積みたるものは、自然これら高尚なる歌曲をも見事に唱誦し得て、よく其趣味を會得し得るに至るべきを信ず、彼の常時徒らに兒童の容易く擬唱し得らるゝものをのみ、多々注入するが

如きは、斯の科の教授上、善良の結果を擧ぐべき所以に非ず、

但し樂曲教授には、必ず樂譜を用ゐ、視覺上の智識をも應用せしめて、意識的練習を爲さしむべき事勿論なり、

〔附記〕本書編纂に當り、一般地方の専門家より聽くを得たる意見の大多數は、一二年生には畧譜、三四年生には本譜を用ゐしむるを以て、適當となせり、

調子

○本篇に於ける樂曲は、其自然の性質と兒童の音域とを考へ、夫れく適當の調子を以て記載しあるものなれば、妄りに移調變換する無からん事を望む、

但し曲により、一音内外の區域に移し得べきものは、演奏注意欄内に之を附記したり、

曲の想

○歌章に意義あるが如く、樂曲にも亦各其想あるものにして、勇ましきあり、優じきあり、廣大なるあり、輕快なるあり、其様一ならず、蓋しこの想こそ、唱歌上最も緊要なる條件にして、これ無ければ樂曲は全く死物と成

り了るべし、本書は毎曲首に必ずこの曲想を附記し、なほ曲によりては、演奏注意欄内に於て更に之を説明したれば、先づこれに依りて曲趣を悟り、其の心を以て唱歌せば、幾庶くは漸次美的興味を會得するに至らん、なほ特に強弱記號及び發想記號を附記したる曲にありては、充分之に留意して、善く其曲の眞趣味を發輝せん事を望む、但し先づ調子及び拍子に熟達して後、強弱及び發想の練習に及ぶを、正當の順序とす、茲に本書に使用したる記號の一般を説明すべし、

<i>pp</i>	最も弱く
<i>p</i>	弱く
<i>mp</i>	稍弱く
<i>mf</i>	稍強く
<i>f</i>	強く
<i>ff</i>	最も強く
<	漸々強く
>	漸々弱く
<i>rit</i>	漸々遅く

速度 ○

樂曲の速度は、また曲想と大關係あるものなれば、其緩或は急に失する事無からん爲め、毎曲必ず拍・節機の度數（ ♩ ）を附記

拍・節機

して、其速度を明示し、なほ一曲中に特別の緩急あるものは、演奏注意欄内に於て更に之を述べたり、

但し新に教授せんとする樂曲は、豫め拍・節機に依りて、其拍子の速度を計り試み、よく其曲趣を會得し置くを善しとす、又若し教授に際して拍・節機を使用する事あるも、曲首三四小節間にのみ之を用ゐれば足れり、一歌曲を通じて拍・節機と共に唱歌するが如きは、機械的に流れて却て曲想を失ふの憂あるべし、

〔附言〕從來唱歌教授の通弊として、樂曲の速度多くは緩に失するの傾あるに如たり、

發聲法 ○

聲音は唱歌上唯一の材料にして、發聲法の善惡は直ちに歌曲の美醜に關す、されば教師は常時兒童の發聲に注意し、能ふべきだけ、善美なる聲音を使用せしむる事を怠るべからず、吸息法も亦唱歌上重要な一條件にして、こはまた呼吸機の發育に關する事大なり、本篇樂譜の上部に記したる、V記

教授上の説明の要

號は即ち吸息の箇所を示したるものなり、
〔附言〕從來該科の教授には、暴聲を用ゐて
絶叫するをのみ活潑なる唱歌法と誤解
するの弊あるが如し、くれぐれもこの項
に注意あらん事を望む、

○ 歌詞の意味に付ては、毎歌章の末に大要之
を解釋したるが、教師は先づ歌曲の題目、歌
意、曲想等により、善く他科との聯絡を考へ、
又既習歌曲との類似点及び差点等を視適
宜に生徒と問答し、或は善く其意を説明し
て、充分兒童の興味を喚起し、且つ教授の聯
絡を計らん事を要す、

注意欄

○ 以上記載以外の條項は、各曲に注意欄を附
して、一々其内に之を記述したれば、毎曲先
づ之を熟讀して、後、教授に従はん事を望む、
○ 第三卷及び第四卷には、卷末に女生徒専用
曲を添へたれば、適宜に之を學期間に配當
して教授すべし、

女生徒専用曲

唱歌教科書卷二教師用

目次

第一學期

一 來れ遊べ	二頁
二 ポート	四頁
三 雨	六頁
四 田植	八頁
五 朋友	一〇頁
六 皇統	一二頁
七 蒙古襲來	一四頁

第二學期

一 乳牛	一六頁
二 海	一八頁
三 眞の勇士	二〇頁
四 月	二二頁
五 行軍を觀る	二四頁
六 泉	二八頁

第三學期

一 雪	三〇頁
二 懷友	三二頁
三 須摩明石	三四頁
四 農夫	三六頁
五 親のめぐみ	三八頁
以上	

來れ遊べ

二

來れ遊べ、我等が友よ、

のどけき春の、花の毛布、

しきつめたる、花の毛布、

植物 探集 ころのまま、

來れ遊べ、我等が友よ、

花にあそぶ、百千の蜂、

動物 探集 おもひのまま、

此歌は春の野外の遊びの愉快と利益とを知らせたものである。
緑一面の草すみれれんげそーなどの咲きみだれてをる野邊蝶々
などの愉快に飛ぶ空、自然を友とし観察の眼を開いてかた
つがひのこてふの蝶々

演奏注意 ○豫習曲として第一學年に出でたる「星の園」を復習すべし
○附八分音符と十六分音符との連絡は特に其拍子を正確に且つ明瞭に
○第一、第二段とは音符の價值を異にせり混すべからず

來れ遊べ

愉快 = (♩=120) (に調四分ノ四拍子)

三

1. 1. 1. 2. 3. 3. 3. | 1. 2. 3. 4. 5. 6. 5. | 1. 1. 7. 6. 5. 6. 5. | 6. 6. 5. 5. 1. - |
 キー タ レ ア ソ ベ フ レ ラ ガ ト モ ヨ ノ ド ケ キ ハ ル ノ コ ノ ノ ベ ニ
 きー た れ あ そ べ わ れ ら が と も よ た の し き は る の こ の の べ に

2. 1. 1. 7. 6. | 5. 6. 5. - | 6. 6. 5. 4. 3. 2. | 1. 2. 3. - |
 シ キ ッ ヌ メ タ ル ハ ナ ノ モ フ
 は ー な に あ そ ぶ も も ち の ー も ー ち

3. 1. 1. 7. 6. | 5. 6. 5. - | 6. 6. 5. 4. 3. 2. | 1. 3. 2. - |
 オ リ イ ダ セ ル ク サ ノ モ ヨ ー
 は ー な に く る ふ つ が ひ の ー こ て ふ

4. 1. 3. 2. 2. 3. 4. 5. | 6. 6. 5. 5. 6. 5. | 1. - 0 |
 ショ ク プ ツ サ イ シ ユ コ ロ ノ マ マ
 ど ー ぶ つ さ い し ゅ お も ひ の ま ー ま

活潑 = (♩ = 126) (と調四分ノ二拍子)



四

潮^{うしほ}　　波^{なみだ}　　風^{かぜ}

み　ち　ぬ　こ　ぎ　だ　せ　よ、

(一)

い　ざ　と　も　に、　こ　げ　や　こ　げ

海^{うみ}　　國^{くに}　　一　の、　男^{おとこ}　兒^こ　な　り、

(二)

い　さ　ま　し　や、　こ　ゝ　ち　よ　や、

こ　ろ　そ　ろ　へ、　こ　ぐ　わ　れ　ら、

さ　わ　ぐ　波^{なみだ}　走^{はし}　る　魚^{いし}

と　び　か　け　る、　舟^{ふね}　は　鳥^{とり}

(三)

か　い　の　羽^{はね}　か　ち　の　爪^{つめ}

こ　ぎ　に　こ　げ、　か　き　に　か　け、

萬^{ばん}　里^り　の　海^{うみ}　も、　なん　の　そ　の、

東^{ひがし}　洋^{よう}　一　の、　海^{うみ}　　國^{くに}　　兒^こ

風^{ふう}　た　つ　も　浪^{なみだ}　た　つ　も、

舟^{ふね}　は　鳥^{とり}　と　た　と　へ　た　の　如^{ごと}く、

かい　の　羽^{はね}　か　ち　の　爪^{つめ}　に　た　と　へ　た　の　如^{ごと}く、

演^{えん}　奏^{そう}　注^{ちゅう}　○第三段に於ける各小節の第一音符は特に稍強聲に歌ふを要す
意^い　分^{ぶん}　に　分^{ぶん}　ち　て　歌^{うた}　ふ　べ　し

注^{ちゅう}　○一個の四分音符の下に二語の歌詞あるものは平等に之を二個の八分符

雨

[illegible]

雨

雨

(小兒) いづこを出でて、いづこに至る、
あしぶみはやく、窓うつ雨よ

(雨) 雲よりいでて、草葉にやどる、
せはしやわれは、きのふも今日も

(小兒) いざ

(三) 野山に、わが身も行かん、
の花に、やどるはうれし

(雨) いなく我ぞ、おん身とならん、
ピアノを弾きて、遊ぶは樂し

(四)

(小兒) あめくさらば、どんとと降れや、
われらが歌と、あはせてやらん

(五)

此歌は雨を生命ある兒童の如くに見たて、兒童とのかけあひ問答の合奏のよゝであるとの意

いづこを出でていづこに至るこへゆくのか

意注奏演

○此の曲段 段及び第二段は八分の四拍子にして第三段及び第四段は四分の四拍子なり音符の價值に注意す
○第二段の末節より第三段へ移る時及び第四段より 第一 段へ反る際、や、其速度を緩むる意なるべし
○「*Allegretto*」は此の所より標ある所へ反へす可きを示し *Time.* は最後、に此の所に終るべきことを速度を漸次緩むべきを示す
○此の歌曲は唱歌體のなれば生徒を二組に分ち甲を小兒、乙を雨となし交互に唱歌せむ其なれば大に興味を興すべし(但し當初は組を分つ事なく全生徒同時に之を授け其大なるを待て組を分つ可とす)
◎ 歌詞ピアノをひきてはオルガンひきてとする可也

樂シゲニ(♩=112)(と調四分ノ四拍子)



八

此早苗が同胞が四命の山田の早苗
も共にな、いざいさましく、

植 う 同 胞 の た め、 御 國 の た め、

田植は一粒萬倍四千餘萬の命の本であるから元氣よく植ゑよといふ意

もう聲にこゑをそろへて

門田の早苗の門田の外に生ちてある苗

千五百の秋日本の國は千五百の秋より足る國とも稱して千秋萬
瑞穂てめづいたい稲の穂うり

○各段の第二小節なる第三拍目の音符は押し付くるが如く歌ふの弊あり
又易し軟かに歌ふ様注意すべし
又各段末節の附點二分音符は必ず其價值だけの音長を保つ様注意を要するなるべし

朋 友

十

(一)

たがひにはげまし、よきにすゝみ、
 ともどもこらして、あしきをさくる、
 これこそまことの、たゞしき友よ、
 これこそまことの、たゞしき友よ、

(二)

うきことあるとき、ともにうれへ、
 たのしきときには、たがひにたのしむ、
 これこそまことの、へだてぬ友よ、
 これこそまことの、へだてぬ友よ、

(三)

まことの友こそ、わが身の益よ、
 骨肉にまされる、たすけとならん、
 もとめてむつべよ、まことの友に、
 もとめてむつべよ、まことの友に、

たがひにはげまし云々 孟子に善を貫くは
 うきことしんばい 朋友の道なりとあり

骨肉 同し親の血しほを
 わけたものをいふ

もとめてむつべよ むつふとはむつまじくすること 故にえ
 らびもとめて中よく交れとのこと

演奏注意 ○ 當曲の如き曲風のものは往々記載音符以外のふしを添ふるの弊生じ
 易し注意すべし ○ 各段末節の附點二分音符は其音尾を殊更押し附くる事なき様注意を要
 意す ○ 快活に歌はしむべし然かも叫ばしむべからず

樂シゲニ(♩=138)(は調四分ノ四拍子)

朋

友

十一

皇統

十二

(一)

みなもとときよき
千秋萬古 いすがは、
たえぬ代々の、みえまなし
四方のたみくき、そだつなり

(二)

みなもととほき、みもすそ川
ながれは千古、たえまなし
たえぬ御系統の、たふとさは、
とつくに人も、あふぐなり

この歌は天皇陛下の御系統が幾千萬年の後までもおかはらない
を戴いてを流るる我々臣民の幸福はとてあらうか、外國人ま
で仰ぎ貴ぶのであるよといふ意である
五十鈴川 宮の御子孫なる皇統はとてあらうか、外國人ま
だともいふ、又みもすそ川は五十鈴川の上流神
千秋萬古 へば萬古といふこと、(くわしくい
四方の民草 へば萬古といふこと、(くわしくい
とつくに人 外國人

演奏注意 ○豫習曲として一學年に出でたる、日本三景を復習すべし
○各小節の第二拍及第四拍音符弱聲部を稍弱く歌ふ様又凡ての符點二
分音符を必ず其價值だけ延長する様注意すべし



皇統



静肅=(♩=84)(は調四分ノ四拍子)

三

ミミ ナモ トキ ヨキ イス ズガ ハー
み な も と き よ き い す ず が はー

セ シ ャン シュ バン コ タ エ マ ナ シ
せ し しゃん しゅ ばん こ た え ま な し

タ エ セ ス ヨ ヨ ノ ー ミ メ グ ミ ニ
た え せ す よ よ の ー み め ぐ み に

ヨ 一 ツ モ ノ タ ミ ク サ 一 ツ ナ リ
よ 一 つ も の た み く さ 一 つ な り

十三

十四

四 百 餘 州 の 大 王 武 威 を 必 の 男 言 み 兒 烈

三度^{さんど}の使^{つか}を、斬^きつてぞ棄^すつる、
邊^へ元^{もと}主^{しゅ}は怒^{おど}りて、血^ちなまぐさく、
海^{うみ}ふりて、山^{やま}なす、兵^{へい}艦^{かん}

雲くも飛とび風かぜあれ、浪なみ逆さかまえき、ば
 六む十じゅう餘よ州しゅうの、健けん兒に立たてば
 權けん時とき宗そう只ただ一いち令れい

數萬の敵兵のころは數人

[illegible]

Q、コッピレツのコッ及び「キッテゾスル」のキッは促聲に歌ふを要す

蒙古襲來



勇マシク(♩=132)(と調四分ノ二拍子)

三三三

5・ 5・ 5・ 5・ 3 5・ 1 2 3・ 3 2 1 2 2 2
ニ ユ シ ユ ヒ タ リ ノ ニ ニ ニ
メ シ ャ ヲ ク ビ ク シ 一 の イ る イ
ソ フ ト ニ ユ カ ヒ ノ ア タ フ 一

3・ 3 2 1 2 2 2
メ 一 ゴ イ テ ゼ
ロ ン ク シ ュ 一 ノ ハ 一 ツ ハ 一 一 一
ロ ン ク シ ュ 一 ノ ハ 一 ツ ハ 一 一 一

2・ 2 2 3 2 2 5 1 2・ 2 2 3 2 5
ミ クン ニ ナ ドリ ル ア プ レ イ ノ ケ マ ン キ
ヘ ん ト カ セ ア フ シ ャ ム サ ノ カ マ ン キ

15

5・ 5 5 3 1 1 2 3 2 2 5 5 3 3 1
イ ア モ ノ ミ テ セ ン ト カ ム 一
シ ス マ リン ド ノ ハ キ ハ ル い ハ ナ ヌ ム 一
ス マ リン ド ノ ハ キ ハ ル い ハ ナ ヌ ム 一

乳牛

十六

朝露

(一) 彼方此方に、角にわけつつ、

なにをあさる。

あとより尾ふり尾ふり、

(二) 母を追ひくる、

わがこ見かへり、うれしげにも、

あゆむさまよ。

けさわがのみし乳も、

(三) それと思へば、

わきてなつかし、ころなげに、

あそぶうしも。

あさる食を求め

演奏注意 ○豫習曲として一學年に出でたる「月の遊び」を復習すべし
○此の曲の最初の半小節は三拍半より初まれり、歌ひ出しに注意すべし
○「あさつゆ」のころの間に自らなる切れ目あり

楽シゲ=(♩=120)(と調四分ノ四拍子)

5 6 7 | 1-1 2 3 1 | 5. 3 2 5 | 3. 1 2 1 2 3 | 1-0 6 6 6 |

一. アサツ ユーノ コル フグサツ ノニワケツ ツ カナタ

二. あとよりーをふりをふりははをおひくーる わがこ

三. ケサリ ガーノ ミシ チチモソ レトオモヘーバ ワキテ



牛

5 1 3 1 | 2 5 6 5 | 5 3 3 1 2 6 | 5 3 2 1 2 3 | 1-0 ||

コナター ニ ココチ ヨーグーニナ ニヲアーサール、

みかへー りうれしげーにーもあ ゆむさーまーよ

ナツカー シ ココロ ナーグーニア ソブウーシーモ



十七

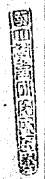
海

雲の (一) 波はてもなく
 空の 低く 山見え
 うしほわき みさごまふ
 大なる わが海よ
 波こそは わが道よ
 舟こそは わが馬よ
 いざゆかん いざゆかん
 海のほか 波のをち

みわたすかぎりはてもなく天と水とが一つきになってをる大
 海その大海に大船を浮べて外國までも乗りまはるといふは實に
 勇壯愉快であるとの意
 みさご 舞ひ魚をとりて海上に
 波のをち 波のあち

演奏注意
 ○○豫習曲としては一學年に出でたる「母の思ひ」を導しとす
 ○○第三段は漸く早く稍速るが如き意にて歌ふべし
 ○○特に發想に注意すべし

海



調大=(♩=104)(に調四分ノ四拍子)

mf

5 | 1- 7 6 | 5- 4 | 3. 2 1 2 | 3- 3-
 ク な め み こ ナ ミ は わ が - め み ち ク ふ

5 | 1- 7 6 | 5- 4 | 3. 3 2 5 | 1-
 ソ ラ ヒ ク ク は ヤ マ ミ ニ - ズ

mp

1 | 2- 2 2 | 3- 2 3 | 4. 3 2 3 | 6- 5
 ウ シ ホ ワ キ - ミ サ - マ フ
 い ざ ゆ か きん - い ざ - ゆ か ん

mf

5 | 1- 7 6 | 5- 4 | 3. 5 4 2 | 1-
 オ ホ イ ナ ル ワ ガ - ウ ミ ヨ
 う み の は か な ゐ - の を ち

眞の勇士

二十

虎をば斬るもの、眞の勇士か、
 城をば抜くもの、眞の勇士か、
 人をば刺すもの、眞の勇士か、
 否 否 否

傲慢いつはり、そねみやなまけ、

虎にもまされる、心の敵を、

おさへてひしぐが、眞の勇士ぞ。

げに、げに、げに。

傲慢いつはり、そねみやなまけなどは我が心に起る敵で、此等の敵が
 必中に起つてくると決して立派な人とはなれぬ。故に此等の敵
 はどうしても亡はさなければならぬが之を亡はすことはよほど
 むづかしい。之を亡はす人ならば眞の勇士であるといふことを
 よんだのである。

演奏注意
 ○豫習曲としては、田植の曲可なり
 ○田植に於けると等しく、此曲も亦各段の第二小節なる三拍目の音符は
 軽く歌ふを要す
 ○イナ イナ イナ 及び げに げに げに には、稍弱く且つ其拍子を稍緩めて歌ふ
 べし

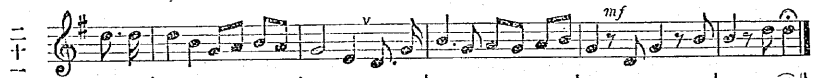
勇壯 = (♩ = 120) (と調四分ノ四拍子)



5・5 | 1 1 2 1 2 3 | 1- 5 1・3 | 5・3 2 1 2 3 | 2- 0 |
 一. トラ バ キー ルー モ ノ マ コ ト ノ ユー シー カ
 二. ご ま ん い つ は り そ ね み や な ま け



5・5 | 1 1 2 1 7 6 | 5- 3 5・1 | 3・1 2 1 2 3 | 5- 0 |
 シ ロ バ ス クー モ ノ マ コ ト ノ ユー シー カ
 と ら に も ま さ れ る こ こ ろ の て き を



5・5 | 5 3 1 2 3 2 | 1- 6 5・1 | 3・1 2 1 2 3 | 1 0 5 1 0 3 | 3 0 5 5 ||
 ヒ ト バ サ スー モ ノ マ コ ト ノ ユー シー カ イ ナ イ ナ イ ナ
 お さ へ て ひー しー ぐ が ま こ と の ゆー しー ぞ げ に げ に げ に

二十一

温和ニ且ツ閑裕ニ *Andante Cantabile* (♩=88)(は調四分ノ二拍子)

mp *mf*

三

ウサギガモチヲツクトイフイニシヘビトノ
かつらの はな が さくといふ ふるうた びとの

カタリツギヘ
いひつた

mp *foco rit.*

イマモシソビユヘ
むかしたたへし

(♩=116) *rit.* 漸次早ク

ジューゴヤオスキサマ
もーみちすれば

ミテリハネ
マハネ

月

注意演奏

○此の曲は寧ろ弱聲を以て頗る遅く(八分音符は四分音符位の考へを以て愛しく且つ優美に歌ふを要す)

○第四段末なる *poco rit.* は稍遅くの意

すめて微聲に終り、さて第二章の歌は再び始めの速度にかへりて歌ひ出

兔が餅をついて居るとか桂の木がはへて居るとか昔より言ひつたよんだのである

桂十五夜お月様見てはねるふるき童謡

紅葉すればや照りまさる

王生忠峯の歌にひさかたの月の花かつらといふ木ださうな

るから光りますので月にもあらうかといふ意

桂十五夜お月様見てはねるふるき童謡

紅葉すればや照りまさる

王生忠峯の歌にひさかたの月の花かつらといふ木ださうな

るから光りますので月にもあらうかといふ意

月桂

古の歌人が、咲くといふ、

月の世界の、あ、海の限は、

跡へ、

月

古の餅を、搗くといふ、

月の世界の、あ、山の限は、

陰き、

(一) 月

(二)

行軍を觀る

二十四

(一)

あれ聞け聞ゆる、喇叭の音

トテト テト テッテテテ

テトテトテ、

兵隊きたる、軍隊きたる、

あかの帽子か、近衛兵

胸に勳章、腰に劔

武裝の士官、いさましや、

赴々たる武夫は、國家の干城

君を守る武士よ、君を守る武士よ、

(二)

あれ聞け聞ゆる、太鼓の音

ドンド ドンド ドンドドンド、

ドンド ドンド ドン、

兵隊きたる、軍隊きたる、

黄なる帽子か、師團兵

背には背囊、肩に銃

武裝の兵士、いさましや、

赴々たる武夫は、國家の干城

國を護の兵士よ、國を護の兵士よ、

勇ましい〜軍隊が来た、赤帽子は近衛兵、黄帽子は各師團兵か、この勇ましい兵士は皆これ國家の干ともなり城ともなりて、國家を護るものであるといふ意

赴々たる 詩經周南篇に赴々武夫國家干城とあり赴々はたけく勇ましげなこと、

演奏 ○豫習曲として「來れ遊べ」を復習すべし

注意 ○「トテトテ」は樂器のみにて奏するも可なり

意 ○國家の「コク」及び「ラッパ」のラッパは悅聲に歌ふべし

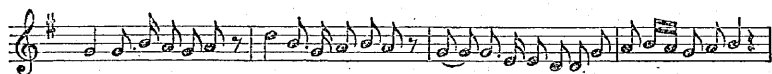
勇マシク(♩=108)(と調四分ノ四拍子)



1 1 1 3 2 1 6 1 | 5 5 3 1 2 0 5 | 1 5 1 5 1 1 3 5 | 5 3 5 3 1 0 |

一 アレキクキコユル リツメノネ トテトテテッテテ テトテトテ

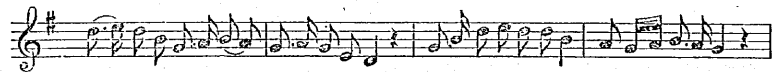
二 あれきりきこゆる たいこのれ どんどんどんどん どん どんどんどん



1 1 3 2 1 2 0 | 5 3 1 2 3 2 0 | 1 1 1 6 5 5 1 | 2 3 2 1 2 3 0 |

兵タイキタル 軍タイキタル フーカノホーシカ コノエヘイ

兵ないきたる 軍ないきたる きーなるぼーしか しだーんへい



5 6 5 3 1 2 3 2 | 1 2 1 5 5 0 | 1 3 5 5 5 3 | 2 1 2 3 2 1 0 |

ムーネニクンゾー コシニクン プソーノシカン イサーマシヤ

せーにははいのー かたにつつ ぶそーのへいし いさーましや



行軍を観る

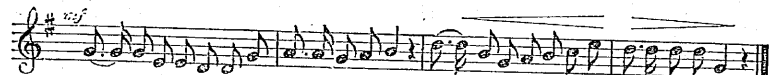
(二十六ページへつづく)



5 5 6 5 | 5 3 3 1 2 - | 1 1 6 5 | 1 1 2 3 1 - |

キムキムタル フーフーハ コーカノカーンジョー

30-30-た る ぶーぶーは こーかのかーんじー



1 1 1 6 5 5 1 | 2 2 1 2 3 0 | 5 5 3 1 2 3 4 6 | 5 5 5 1 0 ||

キーミチマモリノモノノフヨ キーミチマモリノモノノフヨ

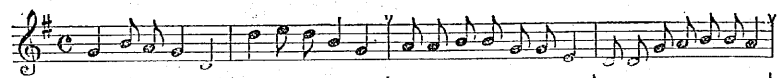
くーになまもりのつはものよ くーになまもりのつはものよ



行軍を観る

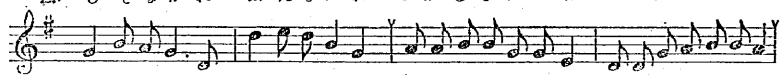
(二十七ページのついで)

軽ク(♩=126)(と調四分ノ四拍子)



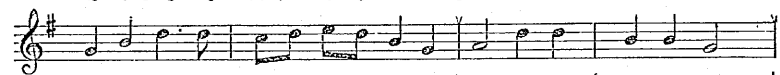
1 2 2 1 5 | 5 6 5 3 1 | 2 2 3 3 1 1 6 | 5 5 1 2 3 3 2 |

ヒ ト シ ヅ ク フ タ シ ヅ ク コ ボ シ キ イ ハ ネ モ リ ク ル ミ ヅ ヨ
ひ と な が れ ふ た な が れ さ か し き た に ま わ り ゆ く み づ よ



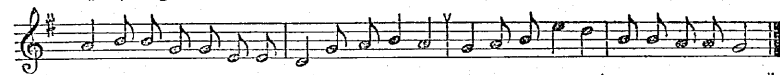
1 2 2 1 5 | 5 6 5 3 1 | 2 2 3 3 1 1 6 | 5 5 1 2 3 3 2 |

ナ ツ ノ ヒ モ フ ユ ノ ヒ モ カ レ ズ ニ ナ ガ レ ト マ ラ ズ ニ ユ ク
あ め の ひ も は れ の ひ も に ご ら す な が れ す み わ た り ゆ く



1 3 5 5 | 4 5 6 5 3 1 | 2- 5 5 | 3 3 1-

ワ レ ラ ノ ツ ト メ モ カ ク ズ カ ク ズ
わ れ ら の こ こ ろ も か く ぞ か く ぞ



2 3 3 1 1 6 6 | 5 1 2 3 2 | 1 2 3 6 5 | 2 3 2 2 1-

カ ク ズ ア ル ベ キ オイ コ ツ マ ズ オイ コ ツ マ ズ ク エ マリ ナ ク
か く ぞ あ る べ き おい こ つ ま ぞ おい こ つ ま ぞ に こ ま り な く

泉



泉

演奏注意

○拍子の緩慢に流れざる様に明瞭に歌ふべく文息の切れ目の目立たぬ様

意注意すべし

此歌章のふしには末の方に、くりかへして歌ふべき箇所がある

こゝしき岩根はしい
かれずに水がなく
さかしき谷間のあひだ
泉は細けれども、さら／＼と流れて、澄も夜も休まない。我等の事
物につとめるのも此の如くでなければならぬ。又これらの泉は
いつも清く澄んで居る。我等の心もその通り潔白でなければな
らぬといふが此歌の主意である。

ひとしづく、ふたしづく、
なつのひも、岩根、ふゆのひも、水よ、
われらのつとめも、なれ、かくぞあるべき、
おこたら、ず、たえまなく、
ひとながれ、ふたながれ、
あめの日、も、は、わけゆく水よ、
われらのこゝろも、なれ、は、れ、の、日、も、
いづまでも、かくぞあるべき、
に、ごりなく、

雪

白がねのうてな、白がねのくさき、
 おも一夜に成れる、雪のけしき、
 ましろや庭の、雪のけしき、
 あれ、
 ナラ、ナラ、ナラ、ナラ。

白がねのはやし、白がねのみやま、
 おもしろや野邊の、雪のけしき、
 朝日てりそふ、
 あれ、
 キラ、キラ、キラ、キラ。

夜の間に降った雪でどこもかも真白になってうつくしい。その
 上になほ降ったり照ったりして景色の變化がおもしろいといふ
 白がねのうてな銀でこしらへた
 銀世界銀でつくった
 仙界仙人の住む世界
 樂土極樂世界

演奏注意

○第一段より第三段までは稍急拍子に(緩漫ならぬ様歌ひ第三段の終り
 を稍緩め第四段四分二拍子は前段より稍遅く歌ふべしアレの二音
 は特に緩くさして最後の二小節を遅く且つ極めて滑らかに歌ひ終り第二
 章の歌は再び始めの速度を以て歌ひ出づべき事前出「月」の曲の如くす
 ○ *ritardando* は *rit* と等しく漸次速度を緩むべきを示せる樂語なり(前
 出雨の曲参照)

雪

愉快 = (♩ = 160) (と調四分ノ四拍子)

mf

5 1. 3 5 6 | 5 6 5 4 3- | 1 2. 3 2 5 | 1 2 3 4 5- |
 シ ロ ガ ネ ノ ウー テー ナ シ シ ロ ガ ネ ノ クー サー キ
 三 ま

6 6 5 4 3 2 | 1. 3 2- | 1 3 5. 6 | 5 4 3 2 1- |
 イ テ ヤー ニー ナ レ ル コ ノ ギ ン セー カー イ
 せ ん かー いー ら く ど い ま め の まー へー に

f

5 1. 3 5 6 | 5 6 5 4 3- | 1 3 2. 5 | 3. 2 1- ||
 オ モ シ ロ ヤ ニー ハー ノ ユー キ ノ ケ シ キ
 お も し ろ や のー べー の ゆー き の け し き

ヤ、オソク *Piu Lento* (四分ノ二拍子) *rit ar dan do*

5 1. 3 | 5. 5 5 5 | 6 5 | 4 3 2 1 | 2- | 5- ||
 マ タ モ フ リ キ ス ア レ チ ラ チ ラ チ ラ
 あ さ ひ て り そ ふ あ れ き ら き ら き ら

懷友

三十二

草鞋を足に、
辨當腰に、

ともに野山を、
かけりし友

あゝその友は、
しらぬ他國に、

誰と野山を、
今かかける。

書物を膝に、
鉛筆耳に、

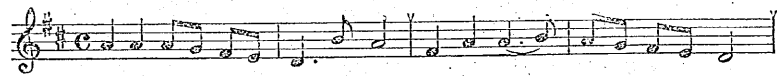
ともに月見て、
かたりし友

あゝその友は、
他國のそらに、

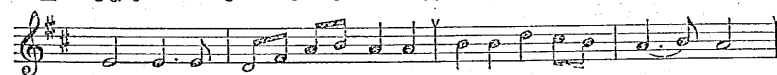
誰と月見て、
今か語る。

誰と野山を今かかける
今は誰とともに野山を
かけてあるくこと

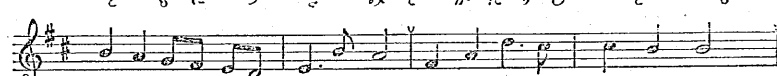
思ヒヲ以テ(♩=138)(に調四分ノ四拍子)



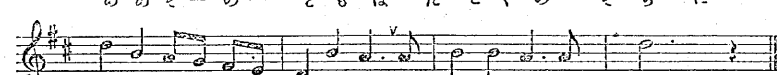
5 5 5 4 3 2 | 1. 6 5 - | 3 5 5. 6 | 5 4 3 2 1 -
ワラヂーラーア シニ ベント コーシニ
しよもづーをーひざに えんびつ みーみに



2 - 2. 2 | 1 3 5 6 5 5 | 6 6 i 7 6 | 5. 6 5 -
トモニ つーきーみて かたりしーとーも



6 5 4 3 2 1 | 2. 6 5 - | 3 5 i. 7 | 7 6 6 -
アアソノートモハシラス タコクニ
ああそーのーともは たこくのそらに



i 6 5 4 3 2 | 1 6 5. 5 | 6 6 5. 5 | i - 0
タレトノーヤマライ マカカケル
たれとーつーきみてい まかかた

懷

友

三十三

須磨明石

三十四

(一) 須磨

浦波よする、
鹽やくる、
須磨山風、
夕をつくる、
吹松、
かげに、
鐘絶えて、
音

(二) 明石

さしくるしほに、
やすらふ帆影、
千鳥にあらぬ、
ながめに一夜、
明石、
波を載せ、
の底、
湯

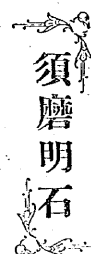
須磨の浦の景色のよいことを言ふならば、波の打ちよせる松の木のかげに鹽焼小屋からでる煙がたなびいて山から吹きおろす風もない夕暮に鐘がこゝくと鳴るなど言ふにいはれぬ。又明石湖はどうかといふに、さし満ちてくる潮には月かがきらめき止まって居る帆のかげは波の底にうつり、その景色のよいのに浮かれて千鳥でもない我さへもながめて夜あかしをしたといふこと。

(俗解)

一夜明石 湯しを言ひかけてある。

演奏注意 ○特に發想に注意すべし
○第二段及び第三段に於ける八分音符の連續は滑かに急がぬよ。歌はしむべし。

須磨明石



優美 = (♩ = 96) (と 調四分ノ四拍子)

mf

1 2 3 1 | 6. 5 5- | 5. 5 3 1 | 2- 0 |

ウ ラ ナ ミ ヲ ス ル ニ ツ キ カ ゲ ノ ニ セ

3. 4 5 3 | 6. 6 5- | 3. 2 3 4 5. 5 | 1- 0 |

シ ホ ヤ ク ケ ム リ タ チ ナ ビ キ

ヤ ス ラ フ は か げ な み の ぞ こ

5. 5 3 2 | 1. 3 5- | 2. 2 3 2 3 6 | 5- 0 |

ス マ ヤ マ ア ラ シ フ キ タ ニ テ

ち ど ろ に あ ら ぬ わ れ さ へ も

mp

5. 5 6 5 | 1. 2 3- | 5. 5 3 2 | 1- 0 ||

ユ フ ベ ヲ ツ グ ル カ ネ ノ オ ト

な が め に

三十五

炎えん 陽やう の ぼる、
鉄てつ 振お り た た の、
る も た の、
君きみ 畑はた に
の 歌うた 小こ
み 聞き 田で
た け に、
め ば

二 銘
(二) 掘
る
も
國
の
た
め

一粒種代子
 萬水く
 億田に子
 の、手
 こく
 歌び
 ふ
 り
 て、
 命け
 ば

黄金こがねとなびく、
うまし
いねを、

今年^{こゝね}のみのり、いづ^いつにもなし、
よろこべ妻^{つま}も、うたへ子^こも。

大平の御代の農夫が、耕しつゝ、思ふ心をよんだのである。炎陽の日に、きらくと霞のよゝに立ちのぼるもの。

おりたつ田子田に下りて居る農夫。
一畝ふるも銀をふりて田を打ちおこすのも。
苗代水に稻の苗をつくつてある田の水のうへに。

つばけや日和云々雨とのほどよくあれという晴天と降
黄金となびく稻がみのりて黄金色になりて風になびくこと
うまし稻みごとないねうましとは美といふこと

○悠々と樂しげに歌ふを要す
○第三段末節なる二個音符は極めて滑かに且つ其第二音符を稍短かく且つ弱く歌はしむべし

三十七

親のめぐみ

(一)

あつくふかきは、御親のめぐみ、
山も及ばず、海なにならず、
泣けばあやかす、寝る目もねずに、
病めばかなしむ、食をもくはで、

(二)

早く笑へよ、笑へば這へよ、
這へばあゆめと、あさゆふ祈る、
あゝありがたき、御親のこゝろ、
胸にきざんで、忘れずあらん、

海なにならず、親のめぐみの深いのくくらべ
胸にきざんで、心にしかとお

演奏注意
○豫習曲としては、須摩明石可なり
○當曲に於て初めて臨時記號用あらる、該音符は初習者には稍困難
○第三段に於ける注意を要するなるべし
○凡てより再び元の速度にかへりて、唱ふべきを示せる樂譜なり
○發想記號に注意すべし

親の恵み

溫和(♩=92(と調四分ノ四拍子))

mf

三

1- 1 3 | 2 1 6 1 | 5. 5 1 3 | 3 2 2- |
ア ツ ク フ カ キ ハ ミ オ ヤ ノ メ グ ミ
は や く ゐ ら へ ゐ ら へ は り

5- 6 4 | 3. 3 2 2 | 3 2 3 3 | 4 4 (5- |
ヤ ハ マ モ オ ヨ バ ズ ウ ミ ナ ニ ナ ラ
は へ ば あ ゆ め と あ さ め さい の る

mp A tempo

5- 6 7 | 1 2 3 2 | 3. 3 2 1 | 7 1 2- |
ナ ケ バ ア ヤ カ ス 3. 3 2 1 | 7 1 2- |
あ い あ り が ー た き ネ ル メ モ の ネ こ ズ こ ころ

mf

5- 3 6 | 5 4 3 2 | 1 5 1 3 | 3 2 1- ||
ヤ メ バ 5 カ ナ 1 5 1 3 | 3 2 1- ||
む ね に 3 き ざ し ん で シ ョ ク ス ラ れ モ ス ク ハ ら デ ん

K136.7

有所權作著

明明明明明明明
治治治治治治治
三三三三三三三
十八十五十五十五
年年年年年年年
四四四四四四四
月月月月月月月
六二二二二二二
一五五五五一五
日日日日日日日
五五五五五五五
版版版版版版版
發行發行發行發行
行行行行行行行

定價金參拾錢

編者 共益商社樂器店
東京市京橋區竹川町十三番地

代表發行者 白井直
東京市京橋區竹川町十三番地

印刷者 野村宗十郎
東京市京橋區築地三丁目十五番地

發行所 共益商社樂器店
東京市京橋區竹川町十三番地

印刷所 東京樂器版
東京市京橋區築地二丁目十七番地

